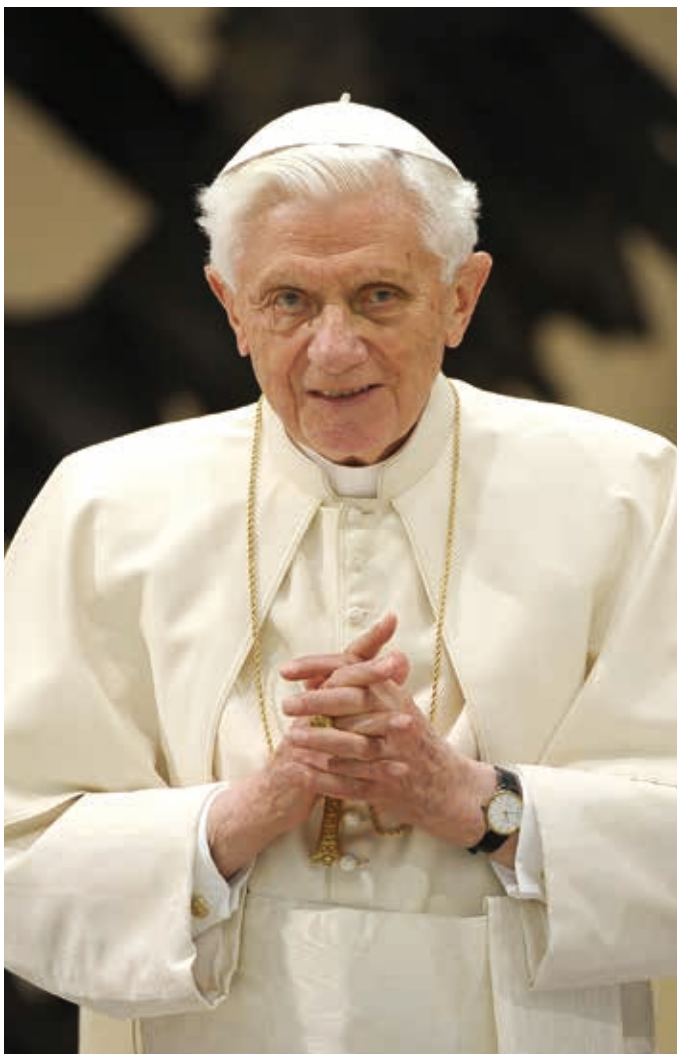
カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 インテックス

名誉教皇ベネディクト16世 逝去

「主よ、愛しています」



©Vatican Media

ベネディクト16世の最後の言葉（バチカン・ニュース）

名誉教皇 逝去

名誉教皇ベネディクト16世が、昨年12月31日（土）現地時間9時34分（日本時間17時34分）バチカン市国で逝去された。95歳だった。

2005年4月19日に第265代教皇に選出され、2013年2月11日の退位宣言を経て、同年2月28日に退位。その後、バチカン市国内のマーテル・エクレジエ修道院で祈りの生活を送られていた。名誉教皇逝去の報が世界中に伝わり大きな悲しみに包まれる中、葬儀は1月5日（木）現地時間9時30分からバチカンの聖ペトロ広場で教皇フランシスコにより執り行われた。

「主よ、愛しています」が最後の言葉となった（バチカン・ニュース）というベネディクト16世。葬儀の後、聖ペトロ大聖堂地下に埋葬された。

訃報を受けて

昨年12月31日に名誉教皇ベネディクト16世の訃報が伝えられ、カトリック中央協議会のウェブサイトでは日本カトリック司教協議会会長の談話が公表された（下段に全文掲載）。

長崎教区では、中村倫明大司教から各小教区に「新しい年を迎えようとする時に悲しいお知らせをしなければなりません」と名誉教皇の訃報がファックスで伝えられ、司教協議会会長の談話も合わせてお知らせが出された。また、長崎教区本部事務局は1月5日付で「1月8日（日）主のご公現のミサの共同祈願に名誉教皇のための意向を作成し、各教会・修道院で追悼の祈りを加える」ように呼び掛けた。

日本の教会は1月10日（火）11時から、東京カテドラル聖マリア大聖堂（関口教会）で名誉教皇の追悼ミサを行った。新型コロナウイルス感染防止のため参列者の制限はあったが、ミサの様子はライブ配信された。

バチカン・ニュースによると、「教皇は、在位中、24回の海外司牧訪問を行い、3回のワールドユースデーと、1回の世界家庭大会に出席、3つの回勅、1つの使徒憲章、3つの使徒的勧告を記し、計4回のシノドスを招集した。84人の枢機卿を任命し、45人の列聖と855人の列福を宣言した。ベネディクト16世が宣言した福者の中には、先任者ヨハネ・パウロ2世の名もあった」。

2008年長崎県営野球場を会場に日本で初めて開催された「列福式」。このペトロ岐部と187殉教者の列福も、教皇ベネディクト16世の裁可で正式に決定したものだった。退位し名誉教皇となられてからも、祈りによって教会を支え続けられた。ベネディクト16世に感謝と祈りをささげたい。

祈祷の使徒　祈りの意向

・教皇
小教区の教会が、信仰と友愛の共同体として成長し、最も困窮している人々を招き入れることができるように

・日本
難民の人たちが、困難の中にも将来に対する希望を持ち続けることができるように

ベネディクト16世教皇様のぬくもり

大司教　ペトロ 中村 倫明

わたしは直接教皇様とお会いしたことがあります。

大村植松教会時代に、大村史談会主催で、天正遣欧少年使節の足跡をめぐるイタリア研修巡礼旅行に同行させていただきました。その大きな目的の一つが、バチカンで教皇様に謁見するということでした。その時の教皇様が、ベネディクト16世教皇様でした。

旅行巡礼団の中から少年使節の一人、中浦ジュリアンのご子孫、小佐々学様とわたしは特別席を頂き、教皇様と言葉を交わし握手をしていただけるという光栄ある機会を得ました。知的、聡明でクールなイメージの教皇様ですが、実際の教皇様のお声と右手はとっても温かく、「ありがとう」と素敵な笑顔でした。思わずわたしはそのぬくもりを両手で受け止めさせていただきました。

そのぬくもりをわたしの手を通して教区の皆様方と分かち合えるように、教皇様にお取り次ぎを願いたいと思います。

（写真は2008年10月1日、聖ペトロ大聖堂前の特別謁見席での1枚。参列者提供。右端が中村大司教）

日本のカトリック教会の皆様

名誉教皇ベネディクト16世の逝去に際して

敬愛する牧者であった名誉教皇ベネディクト16世は、現地時間12月31日9時34分（日本時間12月31日17時34分）、ローマにおいて95年にわたる人生の旅路を終え、御父のもとに旅立たれました。20年以上にわたり教理省の長官として、さらには教皇として8年間にわたって教会を導かれたベネディクト16世の逝去に際して、深い悲しみを覚えるとともに、永遠の安息をお祈り申し上げます。

1927年にヨゼフ・ラッツィンガーとしてドイツで誕生されたベネディクト16世は、1951年にミュンヘン教区の司祭に叙階されました。叙階後は神学者として頭角を現し、1959年にはボン大学教授、その後ミュンスター大学やチュービンゲン大学の教授職を歴任されました。第2バチカン公会議の時には、ケルンのフリングス枢機卿の神学顧問として公会議に参加され、新進気鋭の神学者として注目される中、特に現代世界憲章をまとめ上げるために力を尽くされました。その後、1977年にはミュンヘン・フライジングの大司教に任命され、同時に枢機卿に親任されました。1981年には、教皇聖ヨハネ・パウロ2世から教皇庁の教理省長官に任命され、その後長きにわたって現代社会を旅する教会の神学的支柱として大きな影響を与え、さらに病気の苦しみと闘った高齢の教皇聖ヨハネ・パウロ2世をすぐそばで支えました。

2005年4月19日に、教皇聖ヨハネ・パウロ2世の後任として教皇に選出され、ベネディクト16世と名乗られた教皇は、その8年後、2013年2月11日に、歴史的な退位宣言をされました。それは聖霊の導きに全幅の信頼を置く信仰者としての決断の模範を、明確にあかしされる行動でありました。その日から、名誉教皇として沈黙と祈りのうちに教会を支え続けられました。

教皇就任以前に教理省長官として時にその厳しさが強調されたため、頑固で厳しい教皇という印象が強く残っていますが、実際にお会いすると、優しさに満ちあふれた牧者でありました。特に最初に発表された回勅が「デウス・カリタス・エスト（神は愛）」であったことは象徴的です。ベネディクト16世は、教会における愛（カリタス）の業を重要視され、それが単に人間の優しさに基づくのではなく、信仰者にとって不可欠な行動であり、教会を形作る重要な要素の一つであることを明確にされました。

2011年の東日本大震災の時には、いち早く被災された方々へ心を寄せ、被災地にサラ枢機卿様をご自分の特使として派遣され、様々な機会に、日本の司教団に慰めと励ましのことばをくださいました。優しさに満ちあふれた「愛（カリタス）」の教皇でありました。

名誉教皇ベネディクト16世の逝去にあたり、これまでの長年にわたる教会への貢献と牧者としての導きに感謝し、御父の懐にあって豊かな報いをうけられますように、永遠の安息をともにお祈りいたしましょう。

2022年12月31日
日本カトリック司教協議会 会長
カトリック東京大司教区 大司教
菊地 功

ほしかげ

聖書の翻訳の違いを味わい、みことばに深い関心を寄せる機会があります。コリントの信徒の第二の手紙13章11節を新共同訳聖書では「兄弟たち、喜びなさい。完全な者になりなさい。励まし合いなさい。思いを一つにしなさい」と訳してあります。この「完全な者になりなさい」は他の訳でも「完全になりなさい」「完全であれ」「全き者となりなさい」「不完全なところを改めなさい」と完全さを求められているように訳されています▲ところが、新しい聖書協会共同訳では「初心に帰りなさい」と訳されていました。なぜこのような違いがあるのかと調べてみますと、この言葉は、katartizo（カタルティゾ）というギリシア語で、「正常な状態にする、正しい道に立ち帰らせる、完全にする、創造する、用意する、補う」という意味が辞書に載っていました。天の御父の創造は完全で、神の似姿として人間の本来の正常なあり方は完全であるということなのでしょうか▲カトリック信者として、夫婦として、親として、司祭として「完全であれ」と言われると不完全でしかない自分の惨めさに心がいきがちですが、「初心に帰れ」であれば、よい状態の時を思い起こし、励みになるのではと思います。四旬節に入ります。何度告解しても完全になれないことを嘆くより、初心に立ち帰る心を新たにしたいものです。初心があればなのですが……。（小）

シノドス第16回通常総会に向けて　長崎大司教区のまとめ ❷

なお道を進まれるイエスに従って

―ともに旅する教会の招きに応えて―

※この文書は2022年6月にカトリック中央協議会に提出した回答です

B. かかわり、支え合い、祝いながら旅する共同体

◆熱心な祈りと信仰教育

あれもいい、これもいい、絶対なんかありえないという世俗化の波の中で、長崎の教会は久しく生きてきました。司教も司祭も修道者も信徒も、宣教の名のもとに出向こうとするものの、その方角は世の知恵者たちの後追いばかりです。そして、教会から人の姿が消え始めました。長崎の教会はどんな過酷な状況でも、400年にわたってオナジ信仰をたくましく受け渡してきた教会です。では、どうしたらこの世俗化の波の中で、信仰の喜びと情熱を取り戻すことができるのでしょうか。どうしたら、またみんなでオナジを告白できるのでしょうか。長崎の信仰の歴史は、私たちにその確かな答えを差し出しています。それは、熱心な祈りと、絶え間ない信仰教育です。

祈りによってイエスとの出会いが始まり、絶え間ない祈りによってイエスとの親しさが深まったとき、キリスト者の価値観はイエスの価値観へと変えられていきます。我が子の人生と幸せのために、親が用意する選択肢の中に神や教会共同体が姿を消した今、もう一度、滅びることのない幸せのためにキリストの物差しを取り戻すことは、長崎の教会の大きな課題です。その始まりは祈りのある生活からです。

◆異宗婚とその家庭への支援と配慮

これまで長崎教区が素朴に築き上げてきたキリスト者の家族の在り方は、異宗婚によって試されています。結婚前に信者側の「約束書」提出をもとに異宗婚の障害が免除されたとしても、現実には、異宗婚を婚姻障害とした教会の危惧が、ここにきて表面化しているからです。授かった子どもに洗礼を授けない、日曜日のミサに参加できない、家庭内での祈りの生活などない、さらには、たとえ子どもに洗礼は授けたもののその後の教会とのつながりが途絶えてしまう……。教会内に不気味な内部崩壊が始まっている一端を垣間見ます。その背後に、異宗婚から始まった「信仰を生きるために、困難な状況に置かれた家庭」があることを忘れてはなりません。

しかし、すべての異宗婚が教会の内部崩壊の要因の一つになっているわけではありません。むしろ、異宗婚が教会にとって大きな恵みとなることも知っています。その分岐点は、非受洗者との結婚を望むカトリック信者と、その結婚の準備と挙式に立ち会う司牧者と、異宗婚によって誕生した家庭を取り巻く小教区共同体のかかわり方です。

長崎教区の現勢統計から、夫が信者の場合、のちに妻が受洗することはそれほど困難でないことが分かります。しかし、夫が非受洗者の場合、結婚後受洗することは少なく、また、授かった子どもの受洗も困難な状況です。それは、「妻は夫の家に嫁ぎ、夫の家の宗教へと変わるもの」という、日本社会の暗黙の風潮が根底にあるからです。一方で、結婚後、非受洗者の夫が受洗している場合もあることは事実です。それは、妻の自ら誓った「信仰の保障」への自覚と同時に、最初にかかわった司牧者の熱意と、またその後の小教区共同体の誠実で人間味あふれたかかわりが大きいことを、わたしたちは経験上知っています。

さらに、子どもがカトリックの保育所・幼稚園に通園する中で、子どもの信者の妻・夫の祈る姿、神様に信頼したほのぼのとした姿を通して、理屈抜きに受洗へと向かう夫や妻もいます。そのとき、子どもがまだ受洗していないなら、親と一緒に「家族洗礼」の大きな恵みの時を迎えることもあります。「家族洗礼」の恵みをいただく家族には、必ず、信者の妻か夫が、家庭の中で確かな信仰の証人となり、自らの信仰を育み続けている姿があるのです。

◆信仰教育とカテキスタ養成

「キリスト者の家庭は、信仰の最初の学校でなければなりません。そこでは洗礼の恵みの働きによって神とイエス・キリストと聖母のことが教えられ、その愛を感じられるようになっていきます。またそこは、両親と子どもの行為の基準であるキリスト教の真理を少しずつ学んでいく場でもあります。信仰の教育は、すべての年齢を通じてきわめて重要なことです。この教育が効果をあげるためには、初聖体の前にキリスト者としての生活の手ほどきをし、準備を与えていなければなりませんし、またその他の秘跡を自覚的かつ責任をもってしばしば受けることによって、その教育を継続しなければなりません。そうすることによって、はじめて家庭は『家庭教会』となるでしょう」（ヨハネ・パウロ二世　1977年10月28日アルゼンチン司教団謁見の際に）。長崎の教会には、前述の教皇の言葉を体現した時代がありました。しかし、全体の8割が異宗婚の家庭となり、また、世俗化の波にもまれるキリスト者の家庭にいま理想的な状況を求めることは極めて困難になっていることも事実です。それでも、洗礼の恵みを受け、キリスト者として成長するために信仰教育は不可欠です。祈りのない人生、秘跡の恵みによる慰めのない人生、神の民の一員という自覚も神の恵みに頼ることも知らない人生、それは信仰教育の機会を与えられなかったからです。

幼児、子ども、学生、青年、壮年、高齢者など独自の信仰教育が必要です。宣教しなさいという主の命令は、信仰を成長させなさいという呼びかけをうちに含んでいるからです（教皇フランシスコ『福音の喜び』160参照）。

現在もカテキスタ養成は行われていますが、単なる理論や知識の習得ではなく教育実習などを伴った実践的な養成が求められます。また、カテキスタ自身の成長のためには生涯養成も不可欠です。小教区独自に信徒の中からカテキスタを養成確保することが理想ですが、地域によっては困難な場合もあります。そこで、かつてあったようにもう一度教区全体でカテキスタを養成派遣する制度をもうけ、雇用と生活の保障も含め総合的に再考するときがきています。

どの年齢で、何をどれくらいの範囲で学ばせるかは、教育現場の最重要課題です。カリキュラムがなければ教育は目的を叶えることはできません。場当たり的な教育はもはや教育ではありません。暗記を手段にした問答形式の『カトリック要理』が使用されなくなった後、各小教区ではカリキュラムがないままに現場カテキスタの才量に任せた状態が続いています。そのために、小教区によって教える内容が違い、親の転勤によって小教区を異動する子どもや親に混乱を招いています。そこで、教区の統一したカリキュラムを踏まえた子どものための要理書、また、大人のための要理書の編纂が早急に求められます。

◆司祭・修道者の召命の促進

「一番よいものは神様のために」「神学生、修道志願者は小教区からのささげもの」「司祭・修道者の召命は小教区が成長したしるし」といった信者たちの素朴な信仰が、わが子を司祭・修道者の道へと送り出し、小教区共同体はそのために祈り、物心両面で支援し励まし続けました。そして2022年度の今年、長崎カトリック神学院への入学者は1人、中高合わせて7人になりました。あれほど司祭を待ちわびた教会が、そして62000人を擁する長崎の教会のささげものがたった一人になった現実を、わたしたちはどのように受け止めるべきでしょうか。自前で司祭を賄いきれないならば、アジアの近隣のカトリック国から派遣してもらえば、何の支障もなく事足りるのでしょうか。司祭・修道者の召命減少への危機感のなさが、長崎の教会の衰退を物語っています。

（つづく）

任命

▼2022年12月19日付
教区シノドス担当司祭
岡　秋美師

▼2022年12月23日付
教区シノドス副担当司祭
谷脇誠一郎師

青年のための黙想会

長崎教区では今年も「青年のための黙想会」が予定されています。どうぞお声掛け・ご参加をよろしくお願いいたします。

日　時　2023年3月12日（日）
10時（受付あり）～15時（終了予定）
場　所　長崎大司教館
主　催　長崎教区青少年委員会
申し込み・問い合わせ
各地区担当司祭または大崎教会（TEL 0956-47-6188）へご連絡ください。

CALIS Catholic Life Service
カリス通信　2月号
学校法人向け役員賠償責任保険のご紹介

学校法人の役員の皆様が安心して学校経営に従事いただけるよう、役員賠償責任保険（D&O保険）をご案内しています。

＜学校法人における役員訴訟の事例＞
1. 第三者が役員に対して損害賠償請求を提起した事例
大学の教員が長時間労働により過労死。長時間労働について担当役員が認識できていたにも関わらず、それを放置した。遺族が当該役員の責任を問う損害賠償請求を提起した。
2. 学校法人が理事に対して損害賠償請求を提起した事例
学校法人において、理事が理事会の承認を得ずに、デリバティブ取引を行い、学校法人に巨額の損失を生じさせた。当該学校法人が取引に関与した理事に対し、損害賠償請求を提起した。

＜役員賠償責任保険の主な特長＞
1. 争訟費用を含む費用保険金を幅広く補償します
法律上の損害賠償金・争訟費用に加え法人内調査費用や第三者委員会設置費用、信頼回復広告費用等、幅広く補償します。
2. 法人から役員への賠償請求（法人訴訟）も対象となります
第三者訴訟に加え、法人訴訟（法人から役員への損害賠償請求）も補償します。
3. 役員退任後の補償も安心です
退任された役員については 10年間の補償延長があります。

※「役員賠償責任保険」についてご紹介しました。
ご契約にあたっては、パンフレットおよび「重要事項説明書」をお読みください。

私たちが、お守りします。
三條貴英　毛利玲子　山本泰彦
服部秀昭　川口 薫神父（顧問）

カトリック共済システム
有限会社カリス
〒135-8585 東京都江東区潮見 2-10-10 日本カトリック会館
連絡先 0120-77-0033
カトリック共済システム 検索
22TC-100161
引受保険会社：東京海上日動火災保険株式会社
リスク・補償に関して お気軽に お問い合わせください

カトリック障害者連絡協議会

長崎大会 第1回実行委員会

リモートで開催

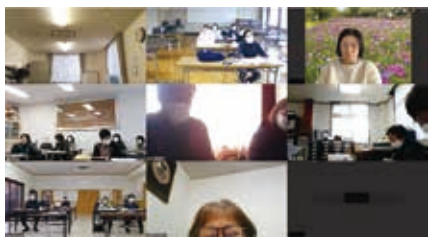
昨年12月25日にカトリック障害者連絡協議会長崎大会の第1回実行委員会を開催しました。10回の準備委員会を経ての開催となりました。

もとは2021年長崎大会開催を目指し2019年から準備委員会を開催していましたが、コロナの影響によって大会が延期になり、いよいよ今年10月に行われることになりました。実行委員会のメンバーは、教区内の福祉活動に携わる団体、また教区内で実施したアンケートで障害者の大会に関心がある、また携わりたいというメンバーから構成されています。

現在は約三十数人で行っていますが、参加したいという方はまだ他にもいます。しかし、障害者や高齢者を招き入れる手段が少ないことが現在の問題として残っています。

この大会は、障害者が声を上げる大会と位置付けられています。当事者の実行委員会への参加を心待ちにしております。現在県内各地を結んでリモートによる会議を開催していますので、今後参加を希望される方は福音化推進部へご連絡ください。実のある大会開催を目標に、皆さんと一緒に意見を出し合い作り上げることができたらと考えています。

（教区福音化推進部）



リモートで行われた第1回実行委員会

2023年10月にカ障連長崎大会が開かれます。大会の準備に携わるカ障連長崎支部への参加はどなたでも可能です。皆様の参加をお待ちしております。

カトリック障害者連絡協議会長崎支部
〒852-8113 長崎市上野町10-34
TEL 070-8569-0522　FAX 095-807-4910
ksrnagasaki@gmail.com
個人情報は門外不出を遵守いたします

祈り、支え合う仲間とともに

長崎カトリック聴覚障害者の会「主和会」

昨年12月18日、浦上教会の被爆マリア小聖堂において、お一人のろう者の方が大きな喜びのうちに洗礼を授かりました。毎月第2（または第3）日曜の手話ミサに与り、会員との交流を深めながら、手話通訳者とともに指導司祭と約1年かけて準備をしました。

「手話」はひとつの言語です。しかし日本語よりも言葉の数がかなり少なく、文法が違う部分もあるため、教会の教えや聖書を学ぶのは大変なご苦労がありました。それでも、神様を信じる心が育まれ、私たちと一緒に歩みたいと思っていただけたことは、素晴らしいお恵みです。洗礼式の信仰宣言では、手話通訳を介した司祭の問いかけに「信じます」と、力強くうなずいてくださいました。

誰でも信仰の道を歩み続けるためには、ともに祈り合い、支え合う仲間が必要です。ある幼児洗礼のろう者の方は「生まれて初めて神様の言葉が『見えた』」と、20歳で初めて手話ミサに与り、みことばが胸に届いたときの感動を分かち合ってくださいました。これからもぜひ多くの方に、手話への関心を寄せていただけたらうれしいです。

（「主和会」事務局）

小神学院で創立記念ミサ

昨年12月8日（木）無原罪の聖マリアの祭日に長崎カトリック神学院で、創立から157年となる記念日を祝い、ミサが行われた。中村倫明大司教が主司式を、養成にあたる2人の司祭が共同司式を務め、この日は全員の参加ではなかったが、神学生、シスターたちが共に祈った。

長崎教区における教区司祭養成は、1865年12月、プティジャン神父によって大浦天主堂司祭館の屋根裏に準備された「無原罪の御孕(はらみ)りの間」に始まる。まだ禁教令が解かれていない中、3人の子どもがその屋根裏にかくまわれながら最初の養成を受けたといわれている。

夕方、同神学院で行われた記念ミサの中で中村大司教は、「神学校は3人の子どもから始まった。今、人数は少なくなったけれど、『神にできないことは何一つない』（当日のミサの福音）という言葉を信じて、マリア様のように『はい』と答えながら祈りつつ歩んでいこう」と励ました。

現在、小神学生は全員で7人（長崎5人・大分2人）。長崎カトリック神学院は「彼らに続く新しい召命の芽生えが求められる。気持ちのある若者を募集している」と語っている。

「核なき世界基金」2周年

広島教区・幟町教会で行事

←当日のライブ配信の映像はこちら

「核なき世界基金」は2022年に創設2周年を迎え、12月11日（日）16時30分から広島教区・幟町教会（世界平和記念聖堂）で、集い「『核なき世界』に向けて私たちにできること」を開催した。

初めに、「核なき世界基金」を支援する会長崎支部の中村倫明大司教がオンラインであいさつし、支援協力と集いへの参加に謝意を表した。第一部は、昨年6月にオーストリア・ウィーンで開催された核兵器禁止条約第1回締約国会議や同8月ニューヨーク国連本部での核拡散防止条約再検討会議に関して、会議に参加した核廃絶地球市民集会ナガサキ代表の朝長万左男氏、ICAN国際運営委員の川崎 哲氏（オンライン参加）、カクワカ広島共同代表の高橋悠太氏、フリーランス記者で翻訳者のアナリス・ガイズバート氏からそれぞれ報告があった。第二部では6人の登壇者が、今後私たちにできること、世界の〝ヒバクシャ〟の支援の在り方について意見や感想を述べ、参加者は核兵器廃絶を目指す人々の取り組みなどをあらためて知る機会となった。

「核なき世界基金」の主な目的は、核兵器禁止条約の批准拡大を後押しする活動の支援、世界の核兵器由来の放射能被害者の支援と放射能汚染からの環境回復の支援、核兵器廃棄を目指す活動の支援の3つ。

集いの最後に、同基金を支援する会広島本部の白浜 満司教が、登壇者と参加者、支援者に感謝を伝え、2020年7月の基金創設から2年5カ月の間に延べ940人の個人・団体から累計1500万円の寄付を頂き、これまで30の個人・団体の平和活動のために900万円の支援をしたことに触れた。そして、「核なき世界の実現のためにこれからも努力を続けていきたい」と語った。

2020年
〝被爆75年から5年間のチャレンジ〟
https://nuclear-free.net/
核なき世界基金

カトリック新聞 創刊100周年

世界や日本のカトリック教会のニュースを伝える「カトリック新聞」（東京・カトリック新聞社）が、今年2023年に創刊100周年を迎えた。前身となる『公教青年時報』は1923（大正12）年1月1日創刊。現在も多くの人々が愛読している。

教区福音化推進部から報告

3年間にわたるコロナ禍生活支援

2020年から行ってきましたコロナ禍生活支援ですが、2022年をもちまして終了いたしました。皆様から手厚いご協力をいただきまして本当にありがとうございました。当時、国からの給付金もある中、それでも生活が立ち行かない人からの問い合わせを受け、支援することができたことは皆様のご協力があったからにほかなりません。支援を受けた方々に代わり、御礼を申し上げます。

コロナ禍支援を始めたきっかけは、教皇フランシスコの「すべてのいのちを守る」という趣旨にのっとり、福音化推進部で掲げている「インクルーシブ（包括的）」という方針から、国の給付金を受け取ることができない人などを支援することを目的に始められました。

始めた当初は主に外国人からの支援申請が教会を通して行われることが多く、その後、支援活動を知った人からの申請が届くような状況でした。このことから分かる問題点は活動の周知です。今回は周知の方法として各教会に名刺サイズのお知らせカードを置いていただきましたが、教会へ足を運ぶ方しか見ることがなく、本当に困っている人へその情報が伝わらないという今後の課題が浮き彫りとなりました。

また、コロナ禍給付金を受け取った司祭、信徒から、寄付金としてそれらを受け取りました。こちらに関しては、一菜募金で支援できない方々への支援を実施しております。本当に困っている方々からの、皆様への感謝の言葉を代わりに受け取っています。

皆様のご協力に感謝の意を添えたいと思います。

コロナ禍支援および生活困窮者支援詳細（2022年12月末現在）

	コロナ禍支援〔一菜募金〕	生活困窮者支援〔寄付金〕
2020年	支援対象者　5人 支援金額　150,000円 （振込手数料330円）	支援なし
2021年	支援対象者　17人 支援金額　500,000円 （振込手数料4,455円）	支援対象者　14人 支援金額　424,000円 （振込手数料2,200円）
2022年	支援対象者　2人 支援金額　60,000円 （振込手数料165円）	支援対象者　3人 支援金額　110,000円 （振込手数料165円）
総　計	支援者　24人 支援金額　714,950円 （振込手数料込）	支援者　17人 支援金額　536,365円 （振込手数料込）

※教区内におけるコロナ禍支援は、一菜募金から支出しました。また、国の給付金から頂いた司祭の寄付金590,000円と信徒の寄付金1,100,000円を使用し、教区外またコロナ禍の影響ではなく別の理由から生活が困窮している方々への支援を実施しました。生活困窮者への支援は現在も継続中です。

ペトロ 宮川 俊行 神父 帰天

12月14日午後9時54分、脳梗塞のため入院先の日浦病院で逝去。90歳。

1932年3月15日茨城県土浦市生まれ。44年9月6日大村教会で受洗。植松教会出身。東京大学経済学部を経て55年4月東京カトリック神学院に入学。57～68年ローマ、ミュンヘンに留学。63年12月21日ローマで司祭叙階。69年3月～90年3月教区教理委員長、69年12月～74年3月要理教育問題責任者、「神学講座」「要理教育研究所」「要理教師の会」の設立に努めた。75年純心聖母会浦上修道院聖堂主管者、88年ショファイユの幼きイエズス修道会大浦信愛修道院付、2005年教区神学顧問。1968年10月から上智大学、福岡と東京の大神学院で教義神学講師。1986年6月～91年5月教皇庁国際神学委員会委員。2016年5月17日付で引退。最後はケアハウスかおり（長崎市）に居住していた。

通夜は12月16日浦上教会信徒会館、葬儀・告別式は17日同聖堂で中村倫明大司教の司式により行われた。

神学校や大学で教壇に立つ傍ら、長年にわたり教区神学顧問として尽力。誠実、無垢な人柄で多くの人々から慕われた。通夜で説教師を務めた山内清海師は、宮川師が「司牧と学者は両立できない。自分は研究の仕事に専念できて恵まれている」と語っていたこと、「教区司祭の霊性」について二人で語り合ったことなどのエピソードを紹介し、故人を偲んだ。

また、葬儀では平野 勇師が、「地位も名誉も求めず、ひたすら神学の道を歩いていた。特に『三位一体』に対する彼の信仰はとてつもなく深く高いものだった」と語り、訪ねた時いつも親しみのある笑顔で迎えてくれた姿と、神を心から愛し、勉学にすべてをささげた人生を振り返った。

会葬御礼

カトリック長崎大司教区司祭ペトロ宮川俊行神父の逝去につきましては早速、ご丁重なる弔問・弔電ならびにご香典を賜り、葬儀の際にはご会葬・献花の弔意に接しましたうえ、各教会・修道院で故人のためにお祈りいただき、誠にありがたく厚く御礼申し上げます。

一々拝眉のうえ御礼申し上げるべきところ、紙上をもって代えさせていただきます。

二〇二二年十二月

カトリック長崎大司教区
大司教　中村 倫明

共同体としての成長問う

島原教会献堂25周年 ミサと記念講演

2022年12月11日（日）喜びの主日。島原教会献堂25周年ミサがささげられ、ミサに続いて記念講演が開催された。

ミサの司式は中村倫明大司教様、講演は古巣馨神父様、他、葛嶋秀信神父様が共に祈るために駆けつけてくださった。参加者約40人。背筋が伸びるような凛とした静けさの中にも温かさに満ちたミサと講演は、参加者一人ひとりの内側に深い響きを運んでくれたと思う。

25年、島原小教区は共同体としてどのように成長してきたのか？ また、私たち自身は、どうだったのだろうか？ もう一度深く振り返ること、それがなければ「日本のガリラヤ」としての島原小教区の歩む方向は見えてこない…との講演の中での問い掛けに、私たち一人ひとりが、留まり、深く思い巡らす。

その中で道は開かれ、主が共に歩んでくださる。さあ顔を上げよう！ がんばれ！ そんなエールをいただいたようなひとときだった。「聖母（伝える）」「慈悲（慈しむ）」「聖体（祈る）」の3つの組からなる島原小教区共同体が、母なる教会の心臓、手、足となることができますように！

（島原小教区）

教区シノドス提言推進の在り方など審議

教区顧問会

2022年度の第3回教区顧問会が昨年12月13日（火）長崎大司教館で開催された。主な審議事項は次の通り。

まず、「司祭年金基金特別会計規程」および「引退司祭施設基金特別会計規程」の制定が審議され承認された。次に、「事務処理規定」改定（これまで、工事の見積金額が200万円を超える場合、責任役員会の決議を受けることになっていた。今回、500万円を超える場合に変更）が了承された。

教区シノドス提言推進の在り方について審議された。その結果、▼推進会議のメンバーは、教区評議会役員36人に諸委員会委員長6人を加えて42人で構成すること▼推進部隊となるコアチームは諸委員会とすること▼教区シノドス担当司祭2人（40代～50代の司祭）を選出し、着実に推し進めていくこと▼関連する情報を教区ホームページに掲載していく方向で調整していくこととなった。

また、萩の（浦上四番崩れによる）流配者の墓地の整備に関しては教区内にお知らせし、寄付の協力を呼び掛けることとなった。

他にも、新型コロナウイルス感染症の影響下、長崎教区のガイドライン対応が確認される（後日、2022年12月19日付で『新型コロナウイルスとともに生きるカトリック長崎大司教区の基本方針』改定版が出された）など、多数の審議や報告があった。

2022年度 第2回臨時司教総会

来年度活動方針など報告

12月6日（火）東京・日本カトリック会館で日本カトリック司教協議会の2022年度第2回臨時司教総会が開かれた。

報告事項▼FABC（アジア司教協議会連盟）50周年総会が昨年10月12日から30日までタイのバンコクで開催▼日韓司教交流会25周年記念誌を発行し、その発行記念式典を11月15日オンラインで行った▼WYD（ワールドユースデー）リスボン大会が2023年8月に開かれる。参加申し込みや費用なども含めた準備状況が報告された。日本から参加する司教は勝谷太治司教（札幌教区）、酒井俊弘補佐司教（大阪教区）、成井大介司教（新潟教区）▼2023年四旬節キャンペーン大綱（12月の常任司教委員会で承認）が報告された。募金目標額は1億円で、国内外を問わず、必要とされている援助活動に配分する▼9月の常任司教委員会で確定した、2023年の司教協議会年間活動方針を次の通り報告した。

①福音宣教を推進する
②新しいミサ典礼書の普及
③教皇訪日におけるメッセージの浸透と具体的活動を図る
④災害や事故の犠牲者・被災者をはじめ、助けを必要とする人を支援する
⑤平和といのちを守る
⑥司牧・生涯養成の継続
⑦中央協議会の運営および業務の遂行

審議事項▼司教協議会内での司教の役職が一部追加され、菊地 功大司教（司教協議会会長）が任命する次の役職を承認した。①「ラウダート・シ」デスク担当はヨゼフ・アベイヤ司教（福岡教区）、成井司教は同デスク責任司教となる②「未成年と弱い立場におかれている成人の保護のためのガイドライン運用促進部門」協力司教は森山信三司教（大分教区）▼7月第4主日に祝う「祖父母と高齢者のための世界祈願日」は、日本の教会からの要請に応え、日本の現状を考慮して移動しても問題はないとの教皇庁いのち・信徒・家庭省長官からの書簡を受け、日本の教会として2024年から同祈願日を9月第3主日に移すことを承認した▼2023年度カトリック中央協議会予算案を承認した。

みことばにふれて 198

濵﨑　敦 神父

（長崎教区信仰教育委員会、サレジオ修道会司祭、愛野教会）

日本代表がドイツ、スペインを破り、決勝トーナメントに進出した昨年のサッカー・ワールドカップでは、日本中が歓喜に沸きました。それにはこの勝利に大きな価値があるからです。それはワールドカップで勝利したという価値です。同じ勝利でも親善試合はもちろんのこと、オリンピックなどの勝利よりも、サッカー界での評価は、世界最大のイベントであるワールドカップという舞台で勝ってこそ本当の価値があるからです。

話は変わりますが、小学生の頃、「この時間は自習です」という言葉ほど良き知らせ（福音）はありませんでした。「おっ、授業がない。つまり、先生がいない！」解放感と喜びに満たされた瞬間です。すぐに友達と話したり、教室の後ろでふざけはじめます。当然、教室は騒がしくなり、先生がやってきます。そういう時は不思議なことに教室内では連携がうまくとれたものです。自然と見張り役の者が生まれ、「先生がきたぞ！」と言ってくれます。するとすぐ席に着いて課題をこなしている振りをします。その繰り返しもまたスリルがあってやめられないのです。しかし、時々、この見張り役のミスで（そもそも自分が悪いのですが）、先生の到来が終末にも近い裁きと化することもあります。先生の到来は、「緊張と恐怖」なのです。

さて、二十六聖人殉教者たちは、人の前でも、当時の政権の前にも、社会の前にも価値を見出していませんでした。彼らの価値観はただパライソ（天国）でした。つまり神の前での価値以外はすべて色あせたものでした。パライソという最高の価値観で殉教の道を歩んでいったのです。そして、彼らにとっては、神の前に召されることは、「緊張と恐怖」ではなく「解放と喜び」だったのです。

私たち信仰者は「誰の前に価値ある生き方をしているのか」という問いかけを常に持つことが大切だと思います。イエス・キリストの前でのみ、価値ある生き方を求めなければなりません。マタイ25章のみことばに触れる時、浅薄な生き方をしている私の価値観はどこにあるのかと反省させられます。「はっきり言っておく。私の兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、私にしてくれたことなのである」

ぶどう園

▼遠藤周作没後25年記念企画展「遠藤周作　母をめぐる旅―『沈黙』から『侍』へ」2021年から開催中　3月24日㈮まで、遠藤周作文学館。一般360円、小中高生200円（団体割引あり）。

▼企画展・日本二十六聖人列聖160周年記念「サントスと呼ばれた聖人たち キリシタンの祈りの言葉」開催中　3月5日㈰まで、大浦天主堂キリシタン博物館。入場料は天主堂拝観料に含まれる。

▼日本二十六聖人殉教記念ミサ　2月5日㈰14時、西坂公園（雨天時は中町教会）。

感謝

―寄付―

長崎大司教区
●宮川家様

長崎カトリック神学院
●川原恵子様（浦上）

右の方々からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

ユリア 中ノ瀬美智枝修道女

（純心聖母会）

昨年12月2日、老衰のため逝去。87歳。

1935年韓国生まれ。終戦後日本に帰国し長崎市神ノ島町で育った。1960年初誓願。69年終生誓願。長崎、東京の純心女子学園で養護教諭として、生徒、学生に厳しいながらも心温かい指導を行った。78年から長崎と山口にある会の社会福祉施設で施設長を務め、21年間、入居者、家族、職員、業者との関わりを大切にし、力を尽くした。

その後、三ツ山修道院院長、2011年から深堀修道院で院内奉仕に励んだ。15年療養のためベタニア修道院へ。19年特別養護老人ホーム「サンハイツ」に入所。明るさとユーモアをもって自らの福音宣教の場とした。

ナタレナ 平田アツ子修道女

（純心聖母会）

12月22日逝去。81歳。

1941年佐世保市黒島町生まれ。1962年初誓願。70年終生誓願。長崎、広島など教区の幼稚園で教諭として、また、純心学園の幼稚園では園長と共に院長としても会員を支えるために尽力し、46年間奉仕、多くの人に慕われた。2006年浦上教会カテキスタ、11年体調を崩してナザレト修道院で院内奉仕をしながら療養した。関節リウマチや脳出血の後遺症もあり、思うように手指や体を動かせないながらも、姉妹の協力のもとリハビリを兼ねて絵手紙を学び、院内展示をして訪問する姉妹や来訪者に見ていただき、喜びを分かち合った。感謝の言葉を絶えず繰り返していた。

マリア 岩崎美智子さん

（岩崎康彦師の母）

12月25日、主のご降誕深夜、長与町のけやき医院で逝去。91歳。

1931年2月3日、西助太郎とイトの長女として神ノ島に生まれる。助太郎は20代半ば、風邪をこじらせ急逝することとなり、その時、イトのお腹には次男がいた。

イトは幼い3人の子どもたちをかかえ、土木工事などにも従事し、苦労して3人を育て上げた。貧しい家庭に生まれ育った美智子ではあったが、母イトから受けた聖母マリアへの厚い信頼のうちに生涯を生きた。

葬儀ミサは12月27日、浦上教会で営まれた。中村倫明大司教と数人の司祭たちが参列し、子である司祭が司式し、神の御手にその魂をお返しした。

マグダレナ 佐古ノエ修道女

（お告げのマリア修道会）

12月28日逝去。91歳。

1931年長崎市生まれ。50年出津修道院に入会。60年初誓願、69年終生誓願宣立。

シスター佐古は、入会して農耕や炊事を通して奉仕していた。本格的に司祭館奉仕を始めたのは50歳を過ぎてからだった。北松・上五島に派遣され、多少のことでは動じない気前の良い性格で、多くの司祭に仕え、愛された。

遠慮のない大らかさで地域の人々とも関わりを持ち、15年ほど前に出津に戻ってからは炊事の手伝いを行いながら、姉妹と共に過ごしていた。

葬儀ミサ・告別式は12月30日、出津教会で行われた。

世界青年の日

ワールドユースデー WYDリスボン大会

2023年8月1日～6日にWYDリスボン大会が開催されます。本大会に合わせた公式日本巡礼団の募集開始は2月下旬～3月上旬で、締め切りは4月20日頃です。詳細はカトリック中央協議会ウェブサイトでご確認ください。お問い合わせは中央協議会青少年司牧部門WYD事務担当（TEL 03-5632-4480）まで。